

令和4年度日立市教育研究会先進校等調査派遣研修報告書

日立市立日高小学校 教諭 大藏 寿美花

1 派遣期日 令和4年9月17日（土）

2 派遣先 東京学芸大学附属竹早小学校
東京都文京区小石川 4-2-1
<https://www2.u-gakugei.ac.jp/~takesyo/>

3 研修内容

（1）テーマ：日常生活から始まる問題解決 5年算数「単位量あたりの大きさ（速さ）」

（2）日程：8：30 受付開始

9：00 挨拶・本時について

9：15 授業開始

5年1組 授業者 平山 秀人 先生

10：15 協議会開始

・授業について

・講話（国立教育政策研究所 笠井健一先生）

11：30 研修会終了

4 感想

今回は「日常生活から始まる問題解決」というテーマの授業を参観しました。単位量あたりの大きさを扱った授業でした。授業の導入部分は、先生の「9月1日って何の日だった？」という問いから始まりました。今回のテーマが児童の日常から算数を考えさせる授業だったので、テーマに沿った問題場面の把握ができていたなと思いました。ただ本時の問題を把握させるだけだと、児童がやらされている授業になってしまうことが多いので、改めて、導入部分でどれだけ児童を引きつけられるかが大切なのだなと思いました。また、授業者の先生の発問も精選されているなと感じました。児童が新たな疑問をもてるように「速さを求めたいのに、なぜ距離を知る必要があるのかな。」など途中に理由を聞いたり、「歩いてかかる時間を求めるためには、何がわかれば解けるのかな。」など、確信に迫っていくような発問をしたり、児童に主体的に考えさせるような発問の工夫をしているなと思いました。授業の流れの中で、児童の発言を聞きながら授業を構成していく難しさを日々感じているので、授業者の先生と児童とのやりとりを見て、授業の中での発問の仕方を考えさせられることが多かったです。さらに、一番印象に残ったのは、授業の雰囲気の良いことです。児童が先生の出した課題を解決するために、自分で意見を出したり、友達の意見を参考にしたりしながら、一生懸命考え、発表している姿が印象的でした。これは普段から、先生が児童の話聞く雰囲気ができているから、児童も安心して発言できる場に教室がなっているのだろうなと思いました。児童が何気なく発した言葉に先生が相槌を打ったり、そこから新たな疑問を投げかけたり、先生主体の授業ではなく、児童と先生が授業を作り上げている雰囲気が終始感じられたなと思いました。私も、普段の授業の中で課題から逸れてしまいそうになると、正解に近い発言をしている児童を取り上げるだけになってしまい、様々な児童の発言をなかなか拾えないときもあるので、今後の自分の授業の参考にしていきたい授業だなと感じました。児童が興味関心をもつための導入、児童とのやりとりなど、授業の中での児童の姿を予想しながら教材研究をしていきたいと改めて感じました。そして、今回の研修を受けて、大きく3つのことについて考えさせられました。

まず1つ目は「発問の大切さ」についてです。授業を参観していて、教師の発問が最小限にされていて、その中でも児童が何気なくつぶやいている言葉を拾い、確信に迫るような発

問の返しをしているなと感じました。例えば、「速いってどういうこと?」「遅いってどういうこと?」など、児童に考えさせるような発問をすることで、児童が理由を考え始めたり、児童同士で疑問を話し始めたりする姿が見られました。発問を厳選することで、児童は、何が必要なのか、何が知りたいのか、なぜ知りたいのかが明確になるのだと思いました。自分の授業では、話しすぎてしまう場面がたくさんあるので、自分自身も児童が自ら考えるような発問を精選し、授業作りをしていきたいと思います。そのためにも、児童が、どこに疑問をもつのか、どこにつまずくのかを日々の教材研究の中で見つける必要性を感じました。教材研究の質を高め、自分の授業力向上に努めていきたいです。

2つ目は「児童がたくさん発言する授業が必ずしも良い授業とは言えない」ということです。これは、国立教育政策研究所の笠井先生がお話していたことで「今回の授業で、既習内容の言葉も出ていたが、未修の学習用語も授業内に飛びかっていた。そうすると、分かる児童が授業を進める形になってしまい、言葉がわからない、苦手意識がある児童はどんどん置いていかれてしまう授業になってしまう。そうならないために、誰かが何かを言ったら、他の児童もわかったか確認をすることが大切です。」という言葉に改めて考えさせられました。児童の発言が飛び交っていると、一見授業が活発に進んでいるような気がしてしましますが、その裏で悩んでいる児童も見逃してはいけないのだと感じました。「協働的に学んでいるときこそ、気を付けて児童の様子を観察しなければならない。」という笠井先生の言葉にも考えさせられました。協働的に学んでいる裏で、学習に躓いている児童はいないか、教師の見取りの力の大切さを再確認させられました。そのためにも、普段の授業から、見取るポイントを精選し、意識して机間指導をしていきたいと感じました。授業の中で、何を大切にしていくのか、もう一度自分の授業を振り返りこれからの授業作りに生かしていきたいと思います。

3つ目は「評価」についてです。笠井先生から「本時はどんな力を身に付けさせたいのか、『何が』理解できたのか、できない児童も授業を通して理解することができたのか、これらのことを見るのが評価であって、教師が児童の雰囲気を見て『何となく』評価してはいけません。発言している児童の意見をメモを取りながら聞きなさい。といっても、そもそもわからない児童はメモにもとらない。ノートが白紙の児童もいる中で、先生は何で評価をするのですか。」ということに改めて言うていました。教師自身が、この1時間の間にどんな能力を身に付けさせたいのか、明確にすることで授業の構想がしやすくなると感じました。また、それがはっきりしていないと、児童の中に何も残らない授業になってしまうのだということに気付きました。評価は児童の様子のみでするものではなく、その時間のノートやワークシートなど形に残るもので評価していくことで、児童の学習の足跡にもなるのだと思いました。自分の授業を振り返ったときに、学習の足跡を何に残すか、明確になっていない時間もあったので、自分も、1時間の中でどんな力を身に付けさせたいのか、何で評価するのかを明確にした授業を考えていきたいと思います。

今回の研修を通して、教師・児童相互の毎時間の評価の大切さ、学習を自分ごととして考え、学んだことを生かし活用する力を身に付けさせる大切さについて学びました。授業の時間で学んで終わるのではなく、今やっている学習が日常のどの部分に直結しているのか、意識させながら授業を行うことで、児童自身が学びへの明確なゴールをもって授業に取り組めるのではないかと考えました。これは、算数だけでなく他の教科でも言えることではないかと思います。現在、私が担任をしている学級の児童の中にも「なぜ、この学習をしているのですか」「今後、この学習は使うのですか。」などの声が聞こえてきます。小学校は、学習の基礎を定着させる段階だと思います。だから、小学生の段階で学習に対する前向きなイメージをもたせるためにも、自分の学びが日常のどこに生かされているのか知りながら、学習を進めていくことは大切なのだなと感じました。私も、普段の授業からいかに、学習と日常を重ねて授業できるか、ということ意識して、これからの教材研究を進めていきたいと思いました。最後に、この研修での学びを自校の研修にも生かし、先生方一人一人が児童に寄り添った授業を展開していけるようにしていきたいと思います。